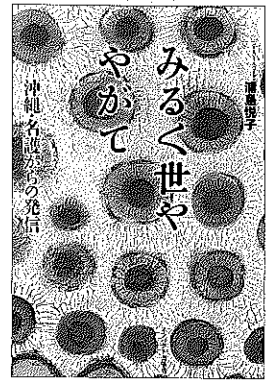


みるく世や やがて 沖縄・名護からの発信

浦島悦子 著/インパクト出版会



本体 2,300 円+税

インパクトシヨンの誌に長年連載してきた名護在住のフリーライター浦島悦子さんによる、辺野古新基地建設阻止運動の渦中からのレポート。五冊目の編集を担当させていただきました。沖縄本島中間に位置し、辺野古岳久志岳の雄大なやんばるの森、その東西に美しい沖縄の海をのぞむ名護市。東海岸の大浦湾、辺野古の海が、普天間基地移設先として標的にされてから約二〇年。生活の糧である美しい海を絶対に埋め立てさせてはならないと、島ぐるみの抵抗がいまこの時も続いています。

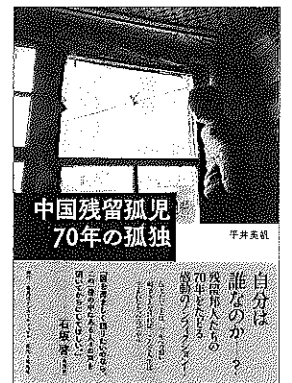
浦島さんも、連日のように早朝キャンプシュワブゲート前に足を運び、機動隊に排除されても座り込むその一人。初参加の私に「無理に抵抗しないようにしているの。怪我したら、明日から来れなくなってしまうか」と教えてくれました。ひるまず、持続させていく力。私が浦島さんの文章を通じて、沖縄の反基地運動につねに感じてきたことです。シユゴン調査チーム・ザンのメンバーでエコガイドも務める浦島さんには、大浦湾の貴重な生態系、やんばるの生物多様性を守りたい、守らねばならないという強い意思があります。さらに名護市史編纂に携わり、たくさんの島の人々に会いその生活や習俗、沖縄戦の記憶、占領下の体験について聞き取りを続けてきた浦島さん。二度と戦争はさせない。ありのままの自然を未来に手渡す。平和な世をつくっていく。タイトルの「みるく世や やがて」には、そのような沖縄の願いが込められています。

政府によるアメとムチ、繰り返される裏切りに、名護市は「海にも陸にも基地は造らせない」稲嶺市長を二期にわたり選出しています。きたるべき豊かな民主主義とは何か。本土に暮らす私たちにこそ、本書は問いかけています。

インパクト出版会 須藤久美子

二〇一二年四月、ゴールデンウィーク中に関越自動車道で起きたバス事故は、七名の犠牲者と三九名の重軽傷者を出す大惨事となりました。事故を起こした運転手は、中国残留孤児二世でした。

本体 1,700 円+税



本書の著者・平井美帆さんはこの事故を調べているうちに、ある女性と出会います。「NPO法人 中国帰国者・日中友好の会」理事長の池田澄江さん。東京都台東区にある事務所は「中国残留孤児の家」と名付けられ、残留孤児やその家族たちの交流の場となっています。「池田澄江」という名前は、私が生まれた時、両親がつけてくれた名前です。でも、私にとつて4番目の名前です。この名前にたどり着くまでに、51年かかりました」という池田さんの数奇な人生に関心を持った著者は、いつしか「中国残留孤児の家」に通い、そこに集う人々の物語を紡ぎ始めます。

約二五〇〇人という中国残留孤児（帰国者）のうち、身元が判明している人は二二〇〇人余

り。半数以上は、今も肉親が見つからず、探し続けています。中国では「日本人」と言われ、日本では「中国人」と言われる。自分たちは、いったい誰なのか。本書では、残留孤児一世たちの過酷な物語はもちろん、二世や配偶者などの家族たちにも取材を重ね、彼らの生き方も述べています。

心に一生消えない孤独を抱えながら、それでも明るくたくましく生きる……。本書は、そんな人々の姿が生き生きと描かれています。

なぜ、戦争をしてはいけないのか？ 本書に描かれている彼らの「70年の孤独」が、その素朴な問いに答えてくれます。

（集英社インターナショナル 高田功）

平井美帆 著/集英社インターナショナル

中国残留孤児 70年の孤独